研究所だより

岩城　由紀子

つい最近、新人事務局員の方から研究を身近に感じないという意見を聞いた。これについて、私に大きな影響を与えてくれた小さな研究者のエピソードを紹介した。それは、現在小学３年生の息子が行った当事者研究についてである。

『子ども当事者研究　わたしの心の街には　おこるちゃんがいる』を読み聞かせ、研究をやってみないかと誘ったのは息子が小学２年生のときだった。「ぼくもやってみる」と言ったのでテーマを決めることにした。すると、すぐに「お母さんを怒らせない方法」にすると息子が言った。確かに本の中でも、父親の態度と子どもの心の動きを関連させて研究しているものがあったが、息子に関してはお母さんに困っていることが動機のようだった。

それから、私は頻繁に「研究は進んでいるか」と声をかけた。しばらくすると、子どもから「いい加減しつこい」と言われたので声をかけるのをやめ、研究そのものも終わったと思っていた。ところが、２か月ほど経ったある日、「お母さんの対処法」というテーマに変わったことと、その研究結果を教えてくれた。それは、ここでお話するのは個人的には恥ずかしいのだが、「お母さんが怒った後は４～５m距離をとる。もし物理的に距離がとれなかった場合は目を合わせない」というものであった。また、お父さんとお母さんの調査方法はだいたい同じであることからお父さん研究もしていたことや、学校から『お母さんの取扱説明書』という児童書を借りてきて「これで研究がはかどるぞ」とつぶやいていた場面にも遭遇した。

私は、息子が何を研究したかというより、どのように研究を進めたかということに多くの学びを得た。それは、①対象者をよく観察し、息子自身が行動を変えながら実践と研究を繰り返していたこと②時間をかけて研究し、問いに対する答えにたどり着いたこと③調査対象者を変えても再現できる調査方法をもっていたこと④関連する本を読むことで研究を進められるという感覚を持っていたこと⑤テーマを実体に合わせて途中で変えていたことである。

現在、私はセンター事業団南部事業本部の「みなと子育て応援プラザPokke」の団会議を含むいくつかの会議に参加するために月２～３回訪問させていただいている。『協同の発見（361号）』（2022.12）での小林明日香さんへのインタビューからつながったご縁だ。息子の当事者研究に勇気づけられ、私なりの方法で実践の記録を試みている。また、大高理事長のゼミの学生12名もPokkeに調査に入る事が決まり、たくさんの研究的視点が入ろうとしている。学生のみなさんにとっては、多くのことを実践から学び、元気づけられる機会になることだろう。